感謝の言葉 ―留学生より

本学と漢陽女子大學との学術・文化交流協定に基づき、第1期留学生として昨年4月に国文学科に編入学した2名が、本日卒業を迎える。来月には、國學院大學文学部日本文学科に編入学する。この一年間を振り返り、感謝の言葉を綴った。

＊　＊

名残惜しい栃木の一年

国文学科　李銀柱（イ ウンジュ）

李銀桂さん
続橋文庫の前で

4月、初めて見る風景、空気の中で、言葉も文化も何もかも違う所で、よく眠れなかった時のことを思い出します。今になっては想像もできないことです。授業はとても充実していて、先生方もとても優しく教えてくださり、留学生である私も不自由なく勉学に集中できました。勉強はとても楽しく、また予想以上に難しく、戸惑ったり迷ったりしましたが、いつも私に力を与えていただきました。留学の目的は、勉強することだと思っていました。しかし、それが全てではありませんでした。日本の文化について体験したことは一生忘れられません。また、人との絆がどれくらい大切なことかを学びました。振り返ってみると、あっという間の一年でした。いつもみんなに助けていただいたお陰でここまでこれたと思います。お陰様で、國學院大學文学部日本文学科三年生への編入学をさせていただきました。言葉では、全部表現出来ませんが、感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思います。本当に、お世話になりました。

＊　＊

栃木での一年

国文学科　李政珉（イ ジョンミン）

李政珉さんと
作品「三体千字文」

２００９年4月2日、日本に着いて、私の留学生活が始まりました。憧憬の対象であった日本でしたが、見知らぬ土地、知り合いもいない寮生活、韓国とは少しずつ違う大学生活で、戸惑いながらのスタートでした。見た目は大人でも、私は子どもと同じでした。異文化のことで、一からまた学びはじめる気持ちでした。家族がいる韓国に帰りたくなった時、日本語が未熟なのに日本語ばかりの本を読んでレポートを書かなければならなかった時、外国人だからできなかった時、誰にもいえない寂しさを我慢した時、いろいろの瞬間がありました。一年が経過するいま、國學院大學栃木短期大学に留学できたこと、国文学科で学び、たくさんの先生方にお世話になり、友だちができたことは、大切でありがたいことと感謝しています。私にとって栃木は、日本の郷里になりました。これからは、日本で地元はどこと聞かれたら「栃木です」と答えます。教職員の方々、友だちたち、本当にありがとうございました。一生憶えています。

書道研究室便り

書道に情熱を傾けた留学生

今年度は新たに漢陽女子大學からの留学生が「書道」の講義を受講。楷行草の三体をどう教えようかと多少戸惑いながら、筆順を別途説明したりしたが直ぐに慣れ、夏休み前には他の学生と同じ様に学習し、目を見張るほど上達していった。何よりも非常に熱心で、日本の学生達が忘れかけた授業への情熱が感じられた。その中の一人が書道部に入部、斯花祭では三体千字文の作品を発表した。また、日韓の友好を願って、佐伯司朗先生が斯花祭のテーマ「月華」を篆書とハングルで揮毫した。本学学生は斯花祭に古典の臨書作品・授業で学んだ作品を、聴講生は源氏物語絵巻の復元模写と詞書の臨書を発表し、格調高い雰囲気となった。

篆書とハングル文字で
揮毫した斯花祭テーマ

続橋文庫開架される

続橋文庫が、平成22年3月15日、自習室として使われている西1号館202教室に開架された。

この文庫は、平成12年9月27日逝去された続橋（つづきはし）達雄教授の全蔵書を、ご遺族から寄贈されたもので、一般書１９１６冊、雑誌40タイトルなどからなる。

続橋先生は、昭和45年に本学に赴任され、以来30年にわたって、近代文学や児童文学の講座を担当され、平成12年3月定年退職された。先生は、児童文学研究の権威で、とくに宮沢賢治の童話の研究では、第一人者であった。児童文学関係の著書や編著書が多くある。それだけに、この文庫は、先生の著書を初めとして、宮沢賢治関係の書物が300冊を超え、さらに小川未明、鈴木三重吉、坪田穣治、新美南吉、浜田広介などの全集も揃っており、まさに児童文学の宝庫である。

なお文庫の登録・整理には、片山喜八郎前図書館館長の指導のもとに、韓国の漢陽女子大学からの留学生・李銀柱さん、李政珉さんが当たった。

教授　林田孝和　記